台湾魅力発信vol.13

盧秀燕台中市長インタビュー

国立台湾大学歴史学研究所博士課程　寺山　学
（元日本台湾交流協会台北事務所総務室長）

今回は、2018年から台中市長を務め、次世代を担うリーダーの一人として注目を集める盧秀燕市長（国民党籍）より、日本との関わり、台中市と日本の関係及び市長としての政治理念などについて話を伺いました。

・インタビュー実施日　　2024年11月６日
・インタビュー実施場所　台中市政府

＜盧秀燕市長略歴＞

1961年、基隆市生まれ。基隆女子高校卒業後、国立政治大学地政学系卒業。淡江大学国際事務戦略研究所修士。
1983年、中華テレビ入社。記者及びニュースキャスターとして活躍し、1990年には台湾版エミー賞とも称される「金鐘奨」の最優秀インタビュー賞を受賞。
1994年、台湾省議員選挙（台中市選挙区）に出馬し、最高得票を得て当選。
1998年、立法委員選挙（台中市選挙区）に出馬し、当選。以後、2018年の台中市長就任まで連続当選。
2018年、台中市長選挙に出馬し、当選。2022年の市長選挙でも勝利を収め、現在二期目（台湾の直轄市市長の任期は最大で２期８年迄と定められている）。

盧市長と日本との関わりについて

――市長は御家族を含め日本と大変深い関わりがあると伺いました。

盧市長　そうです。私の家族は日本と大変深いつながりがあります。私の父は山東省出身の外省人ですが、私の母方の家系は日本時代を経験した本省人で、日本と深い関係があります。母方の家系は新竹の地主で、曾祖父は長男であった祖父の教育を大変重視したため、祖父が20歳の時に、当時まだ珍しかった日本留学に送り出しました。祖父が入学したのは、東京の鉄道学校でした（※戦前、池袋にあった1922年設立の「鉄道省教習所」のことを指すと見られる）。祖父は８年ほど日本で生活し、台湾に戻ってからは実際に鉄道の運転士として働きました。当時、鉄道の運転士になるのは、現在のパイロットよりも難しかったとも言われており、とりわけ台湾人にとってそのハードルは一段と高いものがあったようです。

祖父は日本への留学前に台湾で結婚し、私の母を出産した直後に妻女を伴って留学したことか

ら、母は生後直後から８歳までを日本で過ごしました。この間、母は日本の小学校に通っていたことから、林代子という日本語の名前もあり、日本人の友人からは「だいこ」と呼ばれていたそうです。台湾に戻ってくるまで、母の母語は日本語であり、帰台当初は台湾語が流暢に話せず、よく台湾人の同級生に笑われたそうです。

祖母も日本語教育を受けていたため、日本語は大変流暢で、親族内で聞かれたくない事があると祖父と祖母は日本語で話したそうです。私自身も、幼少期、祖父の家に行くとよく日本語の単語を耳にしました。「お風呂」、「ご苦労様」、「こんばんは」、「いくらですか」など今でも覚えている日本語の単語はいずれも当時祖父の家で聞き慣れたものです。

祖父は同時期に日本に留学した台湾人の友人と、戦後になっても親しく付き合っていました。祖父が亡くなった後、母とともに祖父の日本留学時代の友人たちを訪問したことがありますが、日本文化に慣れ親しんだ人たちであったことから、訪問する先々で自家製の梅干など日本式の食べ物を戴き、とても美味しかったことをよく覚えています。また、彼らの中には、留学を通じて日本人女性と結婚した人も少なくありませんでした。当時の時代背景から、中には台湾にも妻がいて、台湾に戻って来た後、日本人妻と台湾人妻が台湾で仲睦まじく生活するようなこともあったそうです。私が選挙に出馬した際には、祖父の日本留学の御縁から、こうした祖父の友人たちが熱心に私を支援してくれたのを覚えています。

――日本を含め様々な文化的要素を持った家庭環境は、その後の市長の考え方にどのような影響を与えたと考えますか。

盧市長　祖父が私に与えた影響は非常に大きなものがあります。とりわけ、異なる文化に対する寛容性は祖父から教えられたものです。祖父は日本留学の経験から、異なる文化に対し、それを排斥するのではなく、理解しようとする国際的な視野を持っていました。だからこそ、私の母が外省人の軍人であった父との結婚を望んだ際も、当時一般的な本省人の家庭では、外省人の軍人との結婚を望まない風潮があったにも拘らず、祖父は全く意に介すことなく、「出自の違いなど問題ではない。互いの気持ちが通じていればそれで良い」と両者の結婚を温かく後押ししたのです。

この父と母の下で育った私は、幼少期から常に異なる文化に触れてきました。父からは外省人の文化について、母からは台湾や日本の文化について学びました。例えば、結婚式やお年玉などで使われる「紅包」は台湾や中華圏では赤の袋を用いるのが常識となっていますが、祖父や母の影響から、私は幼少期から日本では赤ではなく、白の袋が用いられることを知らされてきました。言語の面でも、父は癖の強い山東訛りの中国語を話し、前述のとおり母の母語は台湾語と日本語でした。父や母を通じて、台湾、中国大陸、日本という異なる文化に触れて幼少期を過ごしたことは、多様な文化に対する私の考え方の基盤となりました。大学を卒業して、社会に出てから、台湾社会には異なるエスニシティ間の問題や省籍問題（※本省人と外省人の対立問題）が存在することを意識するようになりましたが、私は家庭内での自分自身の経験から、寛容な態度で異なる文化に向き合えば、異なるエスニシティの間で相互理解を深めることは、決して難しいことではないと一貫して確信してきました。

台中市と日本の関係について

――台中市と日本の友好都市交流の現状について教えてください。

盧市長　台中市と日本との交流は非常に積極的に行われており、台中市は世界各国の都市と友好都市協定を締結していますが、日本は最多の米国に続き、二番目に協定が多い国です。現在、日本の８つの県や市（鳥取県、山形県、広島県尾道市、愛媛県、青森県、青森県平川市、大分県、群馬県）と友好交流協定を結んでおり、名古屋市とは観光友好都市協定を締結しています。最近の新たな動きとして、2024年12月に宮崎県と新たに協定を締結する予定になっていますが、この度宮崎県と

の間で結ばれる協定は、これまでの「友好交流協定」を更にグレードアップさせた「姉妹交流県市協定」です。これは台中市と日本との関係にとって、関係を更に発展させる大きなブレイクスルーであると見ています。

また、単に協定を締結するのみならず、日本側関係都市との間の相互交流も積極的に行っています。例えば、直近２年間では、鳥取県の平井伸治知事、青森県の宮下宗一郎知事、大分県の佐藤樹一郎知事らによる訪問団が台中を訪問されました。そのほか、台中市で毎年開催している「国際ダンスパレードフェスティバル」や「台中好湯温泉祭り」などにも日本側から積極的に参加して頂いており、こうした交流の場を通じて、日本側とは大変良い交流ができていると感じます。

さらに、台中市では、市のレベルに限らず、区のレベルにおいても日本側と積極的に交流していることも特徴として挙げられます。一例を挙げると、台中市大甲区は熊本県益城町と、台中市和平区は長崎県東彼杵町と、台中市北区は大阪府貝塚市と、それぞれ友好交流協定を結び、草の根の交流を重ねています。

――台中市は歴史的に見ても日本と深い関係がありますね。

盧市長　そうですね。台中市政府のロゴは日本時代につくられた台中公園の中にある「湖心亭」という建築物をモチーフとしています。この建物は、台湾縦貫鉄道の全線開通を記念して、1908年に建てられたものです。日本時代の建物が、現在の台中市政府の象徴となっている点からも、日本と台中市のつながりの深さについて実感して頂けるかと思います。

日本時代について言えば、現在の総統府がかつて総督府であったことに代表されるように、当時政治・経済の中心は台北でありましたが、台中は芸術・教育・文化の中心的な都市として大変重視されていました。例えば、現在も台中市政府の建物として使用している日本時代の台中州庁は、総督府と同じ建築家、森山松之助による設計であり、使われた材料も総督府と殆ど同じであったと聞いています。そのほかに、現存する台中駅の旧駅舎も日本時代に建てられたものです。

台中市政府のロゴ（台中市政府HPより）

また、当時台中において教育が重視されていた一つの証左として、台中市には日本時代に創立され、既に百年以上の歴史を有する小学校が複数存在します。そのうちの一校は、原住民族が多く住む和平区にあります（※1922年に設立された「自由国小」。2022年には創立百周年記念式典が行われた）。

百年以上の歴史を持つ小学校の一つ「清水国小」。
日本時代からの石碑「誠」。

台中市は多くの伝統ある日本料理店があることでも有名です。台中市の主婦たちは様々な異なる料理を作ることができますが、唯一上手に作れないのが日本料理であると言われたりします。そのため、台中市では古くから日本料理店が発展し、お祝い事など特別な日は日本料理店で食事する習慣があります。市内の著名な日本料理店と言えば、「桃太郎」（※40年以上の歴史を持つ日本時代の建物を利用した料理店）、「後引」（※日本時代から続く料理店）、「水車」（※50年以上の歴史を持つ料理店、2024年11月現在営業停止中）など挙

げ始めたらきりがありません。

日本時代の文化施設としては、后里区に有名な台中競馬場がありました（※2018年に開催された台中フローラ世界博覧会の会場の一つ）。また、市内には日本時代の警察関連の施設も多く残っており、そのうち梧棲区にある当時の派出所はリノベートされ、現在は民宿として再利用されています（※同民宿の名称は「梧棲文化出張所」）。これは日本時代の警察施設が民宿として活用される最初のケースです。そのほか、日本時代の刑務所宿舎は、現在「国家マンガ博物館」としてリノベートされています。

台中市では日本酒の製造も盛んであり、特に霧峰区の農業組合は、日本で日本酒の研究を行った上で、独自の日本酒を開発しました。非常に美味しいと評判であるため、是非台中市を訪問された際には、日本の皆様にも味わってみていただければ嬉しいです。

――台中市内には日本の建築家による建築物も目立ちます。

盧市長　日本の建築家は世界で高く評価されており、台湾の文化的背景は日本に近いことから、台湾人は日本の建築家の作品を特に好む傾向があります。台中市は台湾の中でも特に日本の建築家の作品が多く、「日本の著名な建築家の作品を一度に楽しむための近道は台中市を訪問することだ」と冗談で言われたりします。一例を挙げると、現在建設中の台中アリーナや「台中緑美図（美術館・図書館）」はいずれも日本の建築家の設計によるもので、このうち台中アリーナは隈研吾氏の設計によるものです。同アリーナの建設にあたっては、機能面のみを重視する考え方もありましたが、我々は外観にも強いこだわりを持ち、最終的に隈研吾氏に依頼することとなりました。台中市の新たなアリーナの設計が東京五輪のメイン会場、国立競技場の設計を行った隈研吾氏によるものであることは、多くの台中市民が誇りに感じています。また、この台中アリーナは隈研吾氏にとって、海外の行政機関と協力して手掛ける最初のプロジェクトになるとのことです。同じく現在建設中の「台中緑美図（美術館・図書館）」は、妹島和世氏と西沢立衛氏の建築ユニット「SANAA」による設計です。そのほか、既に竣工済みのものとして、2016年に開館した「台中国家歌劇院」は伊東豊雄氏、霧峰区にある「亜洲大学附属現代美術館」は安藤忠雄氏の設計によるものです。なお、安藤忠雄氏とは現在別のプロジェクトでも協力関係を模索しているところであり、こちらも確定次第、詳細について公表できるかと思います。

――日本企業の台中市への投資も積極的に行われています。

盧市長　台中市でも日本製品に対する人気が非常に高いことから、多くの日本企業が台中市に進出しています。近年特に話題となったのは、三井不動産が2018年に梧棲区でオープンした「三井アウトレットパーク 台中港」です。台中市内から20キロ程離れた立地にも拘らず、大変な盛況を見せています。この成功を受けて、三井不動産は2023年５月、新たに東区において「ららぽーと台中」を開業しました。コロナウイルス感染症の影響もあり、三井不動産側も当初は不安に感じる点があったようですが、オープンするやいなや大盛況を見せています。このほか、現在、SOGOと台湾の企業が協力して、高速鉄道の台中駅の近

高美湿地

くに新たな大型商業施設を建設中です（※同商業施設の名称は「高鉄娯楽購物城（仮）」。董事長は原島栄一氏）。

また、台中市で最近大型投資を行った日本企業として、三菱ガス化学傘下の巨菱精密化学が挙げられます。同社は胡志強元市長時代の2000年に台中市に進出した日本企業ですが、台中市の更なる発展を見込んで、昨年新たに47億元を投じて新工場の建設を行いました。同建設案件に対しては、台中市政府としても専門の窓口を設けるなど、様々な形でサポートさせて頂きました。

――台中市は観光面でも注目を集めていますが、市長が特に日本人観光客にお薦めしたい観光地はありますか。

盧市長　日本人の皆様にお薦めしたい観光地は数多くありますが、ここではそのうちの幾つかについて紹介したいと思います。まずは、清水区にある高美湿地です。高美湿地は、数年前に日本のインターネットサイトが行った絶景ランキング投票で、ドイツのノイシュバンシュタイン城を抑え、第一位を獲得したことがあります（※H.I.Sが2016年に行った「行ってみたい！海外の秋の絶景ランキング」のことを指すと見られる）。高美湿地で見る夕日は言葉で言い表せないほど美しいため、是非訪れてみて頂きたいです。

次に、台中市内には原住民族や客家など、様々なエスニシティが共存していることから、多様な文化について触れることをお薦めしたいです。この点、原住民族が多く住む谷関温泉では、2019年に日本の星野グループが台湾初となる温泉リゾート「星のやグーグァン」をオープンするなど、最近では日本からも高い注目を集めています。

霧峰林家の庭園

台湾の歴史について関心がある方には、霧峰区の名家「霧峰林家」の庭園がお薦めです。ここでは清朝時代から続く伝統的な台湾建築について触れることができます。

都市を散策して緑が恋しくなったら、中央公園がお勧めです。中央公園は、台湾全土の都市内公園の中で最大の面積を誇る公園です。先ほどお話した妹島和世氏と西沢立衛氏の建築ユニット「SANAA」が設計を手掛けた「台中緑美図」も同公園の敷地内にあるため、併せて訪問されることをお薦めしたいです。

――台中市長として日本との関係ではどのような点に関心がありますか。

盧市長　最も関心があるのは、観光交流です。様々な歴史的な経緯から、日台双方の人々は互いに好意的に相手を捉えています。観光交流は、双方の人々が最も期待する交流であるばかりでなく、双方の経済の促進にも多大なプラスの効果があります。次に、スポーツ交流です。野球や柔道をはじめ、日台双方では共通する人気スポーツが多く、この面の交流には更なる発展の可能性があると感じます。最後に、文化・教育面での交流です。日本で使われる漢字は台湾で用いられる中国語の漢字と近似性が高い点など、双方の文化・教育面での交流には潜在力があると思います。実際、既に台中市内の多くの学校や民間団体が積極的に日本との交流活動に取り組んでいます。

――台中市長として、今後訪日される予定はありますか。

盧市長　先ほど申上げたとおり、台中市にとって日本は二番目に友好都市が多い国であり、また日本との間の個人的な関係から、私はかねてより訪日を強く望んできました。これまでに多くの日本台湾交流協会の代表にも日本訪問を勧めて頂きましたが、3年前にコロナウイルス感染症が発生し、

終息後は市の業務が多忙となってしまい、この間訪日する機会が得られませんでした。ただ、市長の任期末までには、何としても訪日を実現したいと考えています。

盧市長の政治理念について

――最後に、市長として計８年間の市政を通じてどのような台中市の発展の姿を目指したいと考えていますか。

盧市長　私は市長就任以来、「五大台中」という５つの施政目標を掲げて、台中市の発展に取り組んできました。第一に、清廉でクリーンな政治を目指す「陽光台中」。第二に、経済的発展を目指す「繁栄台中」。第三に、伝統的な産業以外に新たな基幹産業の確立を目指す「科学技術台中」。この点、注目に値する動きとして、台湾の半導体メーカーTSMCは台中市内に既に三ヶ所の工場を稼働させ、米国の半導体メーカーであるマイクロン・テクノロジも、私の任期中に第三期、第四期の大型投資を行っています。科学技術と言えば、多くの人が新竹サイエンスパークを思い浮かべるかと思いますが、実は台中市にある中部サイエンスパークの規模は既に新竹を上回っており、まだ未開発の土地も多く存在することから、今後更なる発展が見込まれています。第四に、空気の質、交通安全、治安など様々な指標において好成績を目指す「永続台中」。最近、台湾の新聞『経済日報』が発表した幸福指数に関する調査では、台中市が全台湾の都市の中で第一位を獲得しました。幸福指数は、前述した空気の質、交通安全、治安などの指標によって評価が決まることから、このランキングにおける高い評価は、我々にとって大変励みになるものです。第五に、「国際化台中」。これは世界各国の都市と更なる交流の拡大を目指すものです。

（編集・写真：寺山学）

取材中の一コマ（台中市政府提供）